



Title	生命と精神
Author(s)	澤瀉, 久敬
Citation	懐徳. 1967, 38, p. 1-12
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/90447">https://hdl.handle.net/11094/90447</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 生命と精神

澤 瀉 久 敬

「生命と精神」という題を掲げましたが、私はこの問題を「精神とは何か」ということと、「精神と生命とはどのような関係にあるか」という二點に重點をおいて考えてみたいと思います。

先ず「精神とは何か」ということを考えてみますと、この問題につきましては、デカルトの精神論が重要であると私は考えます。いったい、精神について語るためには、先ず、精神を純粹にとり出すことが必要なのですが、デカルトはまさにそれを行ったのであります。

では、そのデカルトの精神論とはどういうものであるか。彼は精神を物質と對比させて語っております。すなわち彼は、物質というものを純粹に取り出すことによって、物質の本質を明かにし、それと對比的に精神は精神で純粹に抽出したのであります。ではその物質とは何か。

デカルトによれば物質とは延がりのあるもの、即ち延長性をもつものであり、ただ延長性だけをもつものであります。

ところで、デカルト哲學の特色は、單に生命のない物體を延長とただけではなく、生きた生物及び生物の機能や

行動も延長の立場で理解できるとしたことであります。常識的には生物は單に物質が複雑に組み合せられたものでなく、何か生命力 *vis vitalis* とか魂 *anima* とか呼ばれるものをもっていると考えられるのでありますが、そのような生氣論 *vitalism* や物活論 *animism* に反對して、デカルトは動物機械説を説いたことは御承知の通りであります。

このように物體や生物はただ延長性だけをもつものであるのに對し、精神はそれとは全く別のもの、即ち全然延長性をもたぬものとされます。つまり、デカルトは物質から精神的なものを排除したのと逆に、精神から延長性を完全に追放したのであります。従つて我々は、精神はどこにあるか、例えば精神は腦のどこに位置づけられるかなどと問うことはできない。何故なら、本來空間性をもたぬものについて、それが空間的に何處にあるかと問うことは無意味であるからであります。

このようにデカルトは精神は延長性をもたないものであると言う。併し、これは精神の消極的定義であります。ただ延長の立場から精神について語つただけで、これでは、ちょうど縁は赤でないと言うだけでは縁自體の性格が不明なのと同様、精神自體の性質はわかりません。我々には精神のポジティブな定義が必要です。では、それは何か。デカルトは、「精神とは考えるものである」と答えるのであります。

それでは、「考える」とはどういうことか。それはデカルトにあつては「自覺する」ということを意味します。精神とは「己を知るもの」なのであります。精神についてのデカルトのこの考えを私も認めたいのであります。

これで第一の問題に對しては一應の答を得ましたので、次に第二の問題に這入ります。それは、その精神と生命とはどのような關係にあるのであるかという問題であります。それを論ずるには、豫め、生命とは何かということをも明かにしておくことが必要です。

さて、生命とは何かということですが、それに答えるには、先ず生命現象、即ち生命の具體的な現れを知らねばなりません。生命の實證的な知識なくして生命を語るのは抽象論であります。ただ生命の事實となると私達は、普通、生理現象や生物現象をすぐ頭に浮べるのでありますが、生命を單に biological にだけ眺めるのでは不十分で、心理現象や社會現象をも含めて考慮すべきだと思ふのであります。

もっとも生命の現象は複雑でありますから、皆が手わけしてそれぞれの特殊科學が専門の立場で研究すべきだという考えが出されるかも知れません。併し、それは一軒の家を知ろうとして、柱は大工に、壁は左官屋に、建具は表具屋に、電氣の配線は電氣屋に見せようとするようなものであります。家の諸部分はそのような方法によって精密に知られるではありませんが、それではその家の家としての全體の構えや特色はわかりません。複雑な生命を手わけして特殊的、専門的に研究することは勿論必要なのであります。生命にあつてはそれらの色々な特殊な事實は別々にあつては部分が入り込んであるのであります。特に家の場合とは異つて、生命現象にあつては部分が互に入り込んであるのであります。生理現象の中に心理現象があり、心理現象の中に社會現象がある。生理的生物的現象を全く無視した社會學は抽象的であります。また、解剖學者はただ身體の構造だけ調べればよいのであつてそのもつ心理的乃至は社會的意義を考える必要はないなどと考へてはならないのであります。

それにしても、生命をただ抽象的に思索せず具體的に語ろうと致しますなら、先ず生物體を問題とすべきであります。では、生物と呼ばれるものの特色は何かと言へば、それは、それが有機體 organism であるということにあります。そして、その有機體というものの特色は部分の異質性と機能の多様性ということを通じて、全體の統一性をもっているということにあります。そうして、そのとき特に大切なことは、その統一性と單に解剖學的空間的統一

性ではなく、生理的・時間的統一性であるというのであります。時間的統一性とは、例えば、子供に親の性格が残り、妊娠した婦人の乳腺が発達してくるよう、過去が現在に存続し、未來が現在に先取されているということでもあります。しかもこの空間的統一と時間的統一は相互に限定し合っているというところに生物體の全體性があります。ここに生氣論 vitalism が説かれる理由もあります。

併し乍ら、生物は自分だけで存在するのではなく、外界と不可分の關係にあります。このことを忘れて、生物體を一つの閉された系 system とするところに生氣論の缺點があると思います。生物は、すべて外界との能動・受動の關係において自己を存続させているのであります。

但し、その關係は一樣ではありません。植物のようにほとんど環境によって自分の形態や機能を決定されている生物もあり、動物殊に人間のように外界に對して相當の自由をもって能動的に行動するものもあります。そして、そのとき大切なことは、生物によって外界に對する自由度に差があるというだけではなく、自由度の小さいものから大きなものへと進んできたというところに生命というものの本質的性格があるということです。このように、進化ということこそ生命のもつ一大特色なのです。

しかしながら、その進化を一方的、直線的と考えるはなりません。そのように考えるのが目的論的生命觀であり、生命はあらかじめ定められた目的に向って進んでいるものではありません。生命の進化には色々の方向があり、退化の方向さえ存在します。ただ、人類が辿ってきた道においては、外界に對する自由度は益々擴大しております。そして、それを可能にしているものこそ意識であると考えたいのであります。

では意識とは何か。

意識を論ずるには色々の立場があり得るのでありますが、私は生物を單に有機體とのみ考えずそれを環境との關係において把えるべきだと考えますので、この問題もその見地から眺めてみようと思ひます。それは人間と環境を作用、反作用の關係でとらえることではありますが、この見地からすれば、意識は四つの種類に分けることができるように思ひます。もっとも、これは分析的知性の立場において言えることであつて、具體的にはその混合型の存在するとは申すまでもありません。

さて、その四つの意識とは affection, sensation, perception, apperception であります。そして、その四つの意識は今申した順序に従つて進歩したと考えたいのであります。

先ず、第一の affection であります。これは意識が環境によつて一方的に決定される状態であります。この affection においては生物はただ外界によつて affect (觸發) され、生物の意識は全く受動的に決定されます。ここには人間の能動性はありません。外界の情況がその人の生命を保つのに適しておれば快感を覚え、適していなければ不快であります。例えば、空は晴れ、温度はおだやかで、湿度は低いとすれば、何となく気分はよく、蒸し暑く、鬱陶しい梅雨の季節には何となく不快であります。このように affection の意識状態においては人間の氣持は全く外界によつて決定されるのであります。それを私たちの自我が自由に變へることはできません。というよりも、實はこの意識の段階では自我というもののさへなく、體全體が一つの氣分に浸らされるのであります。affection はふつう「感情」と譯されますが、ここでは氣分 Stimmung と言つた方がいいかも知れません。

次に sensation であります。これは生物體の有機機構が發達し、外界の状態を感受するために特殊な器官が形成された場合の意識であります。即ち嗅覺、味覺、聽覺などの感覺器官を有機體がもつに至つて、外界もそれらの器官

を通じて、感受されるのであります。言葉を換えて申せば、さきに述べた affection においては、意識は全身的觸覺的であるのに對して、ここでは外界は色とか音とか香りとかとして意識されるのであります。このような意識は感情ではなく感覺 (sensation) であります。そうして、このようにして、外界の作用を受ける外部感覺器官が、いわば有機體の表面に、目とか耳とかとして局所的、特殊的に形成されるのに應じて有機體の内部に、それらを統一的にとらえるものとして「自我」が誕生するのであります。このように、自我は外界の刺激の感覺が分化するのに應じて、徐徐に中心に形成されてくるのであります。自我という實體が先ず存在しそれが色々な感覺をもつのではなく、外感覺の分化と共に、自我と言われるものが浮び出てくるのであります。自我があつて感覺があるのではなく、感覺があつて自我が決定されるのであります。花が赤ければそれを赤いと意識し、松が緑であれば、緑と感覺する。要するに、ここでは自我は全く受動的であつて、能動性をもつてはおりません。

自我が能動的となるのは、意識の第三の段階すなわち perception においてであります。perception は知覺と譯してよいかと思ひます。知覺においては自我は外界をただ passive に感覺するのではなく、自我は外界に對して能動的にはたらきかけます。例えば、赤いバラが咲いている時、それをただ赤いと感受するのではなく、その赤はどのような赤であるかを、よく見ようとするのであります。その赤は濃い赤か、淡い赤か、純粹な赤か、それともピンクか、朱色か、脂肪かと、自我は能動的に對象に迫つてゆきます。これが「注意」と呼ばれる意識作用であることは申すまでもありません。そしてこの注意は、當然、對象の違いを區別し、比較し、關係づけることとなる。ここに所謂「知識」が成立いたします。「知識」とは、「物」と「物」とを關係づけるものです。そうしてそのような關係知が益々その關係を一般化し、組織化する時、そこに知的體系としての科學 science が成立いたします。そうして、その科學が進歩するほど、外界に對する人間の自由は擴大し、自然は人間の支配下におかれることとなりますのであります。

ところで、もし知覺と、その知覺の上に成立する科學の發達によって、人間の自然征服はなし遂げられるとするなら、それ以上の意識は不要ではないでしょうか。しかし、もしそうとすれば意識の第四の段階とさきに述べた *apperception* とは何か。

*apperception* とは、知覺によって外物 (*Object*) に能動的に迫ってゆく自我が、その對象から目を轉じ、自分自身を對象とする場合の意識であります。即ち、それは *subject* についての知識である。言葉を換えて言えば、それは反省的意識、あるいは自意識なのであります。 *apperception* という言葉は「統覺」とか「明覺」とか譯すのが適當な場合もあるが、今の場合は「自覺」と譯したいと思ひます。

以上、私たちは意識を四つの種類に區別し、その内容と發展を辿ってきたのでありますが、 *apperception* に至って、自覺的意識というものを發見いたしました。そうして、この自覺的意識こそ正しい意味で精神と呼ぶべきだと私は考へるのであります。

以上申上げました通り、私は意識のうち、特に自覺的意識を精神と呼びたいのでありますが、ここで意識とは何かということをもう少しはつきりさせておきたいと思ひます。

#### 四

意識とは可能的行動であります。あるいは行動の可能性が意識であります。そして、それは二つの意味においてその言へると思ひます。

第一の意味は、意識は現實的行動ではなく、單に可能的な行動である、ということですが、一つの行動が現實に、實際に、行なわれている時には私達はそれを意識いたしません。一つの行動が何かによって阻まれた時、私達は意識をもつのであります。例えば、胃が健全な状態にあつて消化作用を行なっている時には、我々は胃の存在を意識しませ

ん。私達が胃を意識するのは、胃が何かの故障によって正常な機能を果し得ぬ場合であります。つまり、胃が現実的行動をとどめて、單なる消化の可能性となる時、胃の意識は生ずるのであります。

次に「意識は可能的行動である」という言葉の第二の意味は、私達は何かについて意識をもつ程度に應じて行動が可能であるということであります。例えば、一本の木が野原に立っている場合、それをただ木としてだけ意識する間は、私たちはその木をただ木としてだけ利用します、例えば、夕立の際に雨宿りをするように。ところが、その木が松とか杉とか意識されるなら、松は松として、杉は杉として使用しうるのであります。そうして、更に木の幹や枝や葉や花が區別して意識されるなら、それに應じて我々がその木を利用する度、即ち行動内容も緻密となるのであります。我々の文明の進歩が科學の發達に比例するのもそのためであります。分子單位の科學が原子單位の科學となり、更に素粒子單位と進むに伴って、我々の文明も擴大されるのであります。

以上、二つの意味において、意識とは可能的行動であります。そうして、そのことを私は今まで行動の可能性という點に重點をおいて述べてきたのであります。實は、そのことと共に、意識は行動であるという點を私は、次に、強調したのであります。即ち、意識とは純粹認識ではなく、實踐的認識であることを知るのが大切であると考へるのであります。意識は普通は外界をありのままに表象するものだと思われておりますが、意識とはそのような純粹知ではなく、實踐知なのであります。従つてまた、意識とは本來的に身體的なものであることをはっきり認めねばなりません。

では、すべての意識が行動的、身體的であるかというところではありません。純粹認識としての意識が存在します。そしてその身體的ではない意識、純精神的な意識を可能にするものこそ精神なのであります。そうして、その精神とは自ら自己を知るものとしての *apperception* であることは上に述べた通りであります。

しかし、このような考え方はあまりに觀念的であると非難されるかも知れません。或いはそれは單なる心理主義で

あると評されるかも知れません。しかし、自覺というものを心理的なものと解することこそ心理主義であり、謬った自覺論ではないかと思えます。自覺とは、三木清も言った様に、單に意識の事實ではなく、存在にかかわるものなのであります。自覺とはただ心の内を見ると言うことではなく、存在が自己を表わすことなのであります。このことを巧に、しかも明瞭に語っているのがパスカルの「考える葦」であります。

パスカルはあの有名な斷章において、comprendre という言葉を二つの意味に使いわけております。即ち、我々人間は大自然の中に comprendre されている、包含されている。その見地からすれば人間はか弱い葦であり、一點にも等しい微小な存在であります。自然は人間を殺すのに大げさに武裝するには及びません。ただ一滴の液體さえ、人間を殺すことができます。しかしながら、自然は、自分が人間を殺すということも、自然は人間より優っているというかも知りません。それに反して人間はそのことを comprendre しております、知っております。ここに考える者としての人間の偉大さがあるとパスカルは言うのであります。このように知るとは自然あるいは存在が、自己を自覺することであります。このような自覺は單に心理的なものではありません。それはどこまでも存在の自覺なのであります。

このようにして、自覺とは存在の自己認識であることはパスカルによって明かにされました。しかし、私はこのパスカルの言葉をそのままに受け入れるのを躊躇いたします。と申しますのは、パスカルにあっては、自然或は存在が先ずあり、それが自分を自覺することが知るといふことでありますが、「存在」とはそのように既に出来上つたものとして與えられているのではなく、現に生成しつつあるものではないかと私は考えるのであります。そうしてその存在の生成、發展と共に地上に生物も生れ、その生物は現に進化をづづけているものではないか、そうしてその進化の先端に人類は位置づけられているのではないのでしょうか。そして、そのように人類こそ宇宙の發展の *avant gard* であるとすれば、そのような能力を人間に賦與しているものこそ精神ではないかと考えるのであります。

或はこう言ってもよい。もし存在が不動な永遠的存在であるなら、その存在は反省的自覺によって知ることができ。しかし、存在とは常に生成するものであるなら、存在とは何かということとはただ反省的にはとらえられないのであつて、存在は自ら自分を作ることによってでなければ自分が何であるかを自ら知ることができないのであります。それは丁度藝術家が創作するに當つて、自ら作つてみなければ、自分の力がいかなるものであるかを知ることができぬのと同様であります。ともかく、存在は不動ではなく、進化發展している。そうしてその最先端にあつてその存在の前進を導くものこそ精神であると考えたいのであります。では、どうして精神にそのようなことができるのであるか。ここで、精神というものの性格を更によく調べてみる必要があります。

## 五

精神とは、先ず、考えるものであります。そして、考えるとは雑多なものに統一を與えるということとであります。その意味において精神とは秩序の原理であります。

ところで、その精神は同一的なものを嫌います。そのことは、精神は單調 *monotony* をよるこばないと言ひ換へることもできます。そうして、それを時間的に申すなら、精神は反覆を嫌惡するとも言えましよう。精神は同じことの繰返しには堪えられないのであります。

それだけではありません。精神は既にあつたものをよるこばぬだけではなく、現にあるものにも満足しません。精神とは常に否定するものなのであります。しかも、その否定は對象に對してなされるだけでなく、自己自身に對してもなされるのであります。精神は自己批判をするもの、無限に自己反省をするものなのであります。つまり、精神とはつねに自己を否定するものであります。

しかしながら、このような精神の否定は、ただ否定のために否定するものではありません。現にあるものを否定し

て、新なるもの、未知なるものを憧憬れるのである。しかも、それはただ新しいもの、珍しいものに惹かれるだけではなく、より優れたものに憧憬れるのである。精神は常により、善いもの、より美しいもの、より正しいものに憧憬れる。否、ただあこがれるのではなく、自らそれを作り出そうとするのである。そうして實際にそれを自ら創作するのであります。

もつとも創作には材料が必要であります。Materie なくしてはいかなる創作も不可能であります。そのことは藝術家の製作においても科學者の發明においてもその他いかなる種類の創作においても同様であります。

しかし、ここに見逃してはならぬことがあります。それはそのような創作を導く idea そのものは無から生ずるということです。新しい idea は未だ曾て存在しなかつたものであればこそ新しい idea なのであるが、その idea を精神は自分の中から自分で引き出すのであります。手品をする人は空の箱からハトや花や萬國旗を引き出しますが、それは無からの創造ではありません。それはただ觀客の目から隠されていたものを引き出すだけであります。その點、子供が母親から生れるのは素晴らしい創造であり、そこには新しい生の誕生があります。嬰兒の産聲は正に生れ出した生の歡喜の叫びであります。併し、實はこれも無からの創造ではありません。子供は兩親の精子と卵の結合として生れるのであり、それは更に兩親の祖先の遺傳子や自然的並びに社會的環境の制約を受けております。従つてこれも眞の創造ではありません。ところが、精神は自分の内になつたものを自分の中から引き出すのであります。この無からの創造、この精神の創造こそ眞の創造なのであります。そして、この人間の精神の創造が物質を介して具體化する時、そこに人類の文明が形成されてゆくこととなるのであります。

ただし、このような精神の創造が行なわれる爲にはそれを行ないうる條件に精神がおかれなければなりません。十分な物質的條件なくしては精神はその機能を發揮し得ません。その物質とは、勿論、自然的物質だけではなく社會的物質、特に經濟的な意味での物質でもあることは言うまでもありません。

この點から申せば、問題は精神の側よりも物質の側にあると言ふべきでありましょう。少なくとも物質を無視して精神を語ることは抽象論にすぎないのであります。

しかしながら、また、精神にとって物質は條件にすぎないということ、そうして條件はどこまでも條件にとどまるということをお忘れてはならないのであります。數學においても、條件が與えられるということは、ただ問題解決の出発点にすぎないのであります。問題の解決そのものでありません。また、畑がいかに豊饒であつても、畑という條件だけでは大根も人蔘もはえてきません。また、川の流れは地形に従つて流るのではあるが、水そのものは泉から流れ出るほかはありません。これと同じく、人類の限らない創造を湧き出させる源泉こそ精神なのであります。つまり精神こそ創造の泉なのであります。

そうして、そこに初めて動物の進化ではなく、人類の歴史が生れるのであります。このようにして、歴史を形成するものこそ精神である、と申すより、私たちは精神によつて歴史を導かねばならぬと考える次第であります。